誹諧
當句
てにをは
級統
手學

へ 5
1414

新門 歸卷 1414 1-1

天保十五甲辰夏

黒樹園先生著

誹諧證句 てにをは級鏡嘗試單學

大津氏所藏

東都書林 誠格堂 發兌

誹諧玉石光源句集

東都 門人 累樹園選
源季隆篇

序

嘗弄み俳諧の事。辞玉天造言波あり。律究る時い
楽しみあるべきを。其時の為ならず。
那ち人。歌の為ならず。尚書曰詩を永うするといふ。
詩詩を句所。別ち辞を言とし。形い雅ならを言とし

俳諧を俳諧平一切の
高みて活用の妙所
かや説世み行ふ教。
流みて西風と称す。
事ふよ教す。
先つ音義言令の
私一切ふ教ふ
と事師ふ重つ

子俳言義を誤
幸世ふ行つ級
舎ってるを初め
教ふ俳句ふ
事いたらん
俳。師
俳書ふ
問ふ

附言

芭蕉翁俗談平話の誹諧奥立の始め先つ北村季吟の門に入りて大御國の言義天迹表波の例格を学ひ猶佛頂禅師に参して観相を得の仏正風蕉門の一道ありて今に於て天下普く所知也て其本義を猶ひ。俗談平話に示されし多能の言令天迹表波の如き雅言に用ひ正しきを而已ありて誹諧歌に用ひ正しきを交へたる事との如きまゝ。俗語ふ俚通の平話又ハ俚語方言等を交へて孔のめく雅やかなる事ありとも言令天迹表波ハ其中よりて俗談又ハ俚語ふ倒有言令ありて時ハ過現未よりお物ひて。天迹表波多くる時ハ自他をふるまひ有りて物ひ。今の誹士共を参て。其上仮名の正理を知ざる人の誹諧を咏るハ

なり。誹諧本式といふはみだりなる筆をゆるしぬ。其の秘士のくさりなる

ものゝ説訛の此世まで手おちける事なれども、しらざらん人の為に書く事也。

翁は能く歌学に通達して言義天迹表波を誤る事はさらさらな

けれども其頃は今の如く正しき記載の道理も定まらざれば独り

を学びて依りて能く無への違ひもあれど例格を立て門人に示す

所までは及ばざりき。故に翁の文章誹句にも誤りなく門人其角

嵐雪許六支考などは皆誤り多し。就中で支考は漢

學の才ありて和学をもしらざれば、説誤を得手にて云ひむかへ翁

没後になりては却の説天下に独歩をなして何にも翁の正

傳なりと偽り天迹表波の事も廿五ヶ条の例格を立てたり。

是を蕉門の奥秘として口傳といひ、能く誹道のもしらぬ人もあり。

世の人是を尊び学ぶといへども本より正實の例格ならざれば

は言令をしらざれば。皆天迹表波に習りてかぞふる事也。

或は其を切字とまへいへり。皇國の言令字をもて切る事を

こそ知らずして加へたる謬言なりける。其貳拾五ヶ条を

○第一段むしをぬる事　第貳治定さぬてをぬる事　第三清め

てをぬる事　第四くく字略しぬる事　第五為に開ひぬを略事

第六やの字扱ふ事　第七哉やの事　第八やはの事　第九ぞはけらず

ものゝ事　第十ぞ名をかぞへる事　第拾壹志かのてにをはの事

第拾貳志そのてにをはの事并過去のし　第拾三らいの事　第

拾四らの体め字の事　第拾五志をとる云詞の事　拾貳条に似たり。但し句の終也　第

拾六之しのをとる事　第拾七らぬしとして又かりがねの事

第拾八不定なるてにをはの事　第拾九用意抱なるて

云つれざるに此の事　第貳拾句に魂を入べき事の事　第貳拾

壹休字のこと　第貳拾貳ともゑれのこと　第貳拾三ゝ香やのこと　第貳拾
四隅句のこと　第貳拾五同字の事

○ぬ新貳拾五ヶ条の名目を立て数万の言令天逆袁波の宣ともせむ
と思ひけれバ何ごとも言義例格の本でふかゝれたちのまゝ五十音圖し
て無量無辺の言の葉をもらしきたまりなし　此五十連音
五階十行の例格をもつて法用するすべをまへ知り附ハ来ぬらん
つもりなん或ハ捨へ字不定をもつて語れなしとて彼の格のべきか
ずもハ是支考も形見ずして嘘言形ちるゝを志るべし。さとれ後
の俳士必依じ用ふべきなれ。依りて近頃本居宣長の著せる
紐鏡ハ言令表をしるしめすべきなりと先づ学び始めむ人の鏡と
志るべきなれバ俳諧とても天逆袁波に依りてハいはさしかし
まづハ法ることを初学に暁さむとかの紐鏡を本に倣へて辞せの

本句もてたゞ發句の前日入学のはじめとせむと先学て海して
其正しき姿を志らしむるためなれ。新しき事を初学に何れも古人の本句言令
正しきを志らバ誹諧者流なぞとて皇國の言義を顧へ知らざるなり。只
志らぬ者を除かんと言令天逆袁波に言を出れハ句作の上までも
也なるをもつて初学にハいかでまぎらしおけるにいたらし見漏るる
なりし。抑天逆袁波の例でふ物ハ切字もてしるべきなれ　ども
ひとつ。起る辞の本末を顯ひて末を結ぶの原とし例ある古歌
をまれ。文章などの誹句にまでもまで此例を守らざりけりしなば
はも徒の終り辞は附い来を結ぶべき辞数しりて紐鏡
なの行り西拾三段の辞其でのや何の終り辞とぞい同中の行
り四拾三段の辞其くて其の終り辞までい同応の行り四拾三段の
辞なくて結ぶのべき例なり。世に誹句の切字と呼びてもちひある其を

ぐらいに変革を施こさう。言令如き辞を言て切字と云ひ体言と云ひ活言と云ひ先つ其の辞より辞よて壹段か抜き出し
くに山里もとよりたゝ現在のまゝてなくて過ぎ例
ばかり。又連しもあらう。又もと無りたゝ白雲
かをもとらやまもとゝうたゝ
ひとう徒の辞りとのつるいまもでのや何と我等の辞あるを仮
りよ徒とゝうりとのつるいまもでのや何と我等の辞あるを仮
ゝう辞きひとそも皆かゝう四拾三段の辞まて抜ふべき仮
く。扨又上の辞我のや何と誓ふ付て辞七有りて
志とゝうをもよる我う例く成そ
此きゝの辞者まて幸い用一辞

く辞うまてなべくの中何か我の辞皆きよ抜る例なる事い
壹段の備へまて本句せをまて
附いまをも迎してくれの二音と
とうも名と我等のくれ水仙等あいつるをもびまて本云等むきし
ゝきく我のく辞うをおくべし。新撰の例定りの
うてまれ結い辞もみぐうまゝ。
う級鏡四十三条合して百貳拾九段の辞せて其格を備へる
歩く。然れども此級抜い唯大凡の例格をおうまでの物ていくあ
しくべし。是等の辞を学びまむる門人源か
季隆が著は変の辞を委細て史を見給り其来言うり
辞言もまてゝ委しくまゝ。
此白まゝゝまゝ。

凡例

○此書ハ初學早ク覺ヒンカタメニ誤字ヲモ誹書ヨリ古ク
用ヒテ俳通ヨリ通用ノ文字ニ改メタリ。若シ異説ヲ好ム
冬鮭ヲ鮭河豚ヲ鱶ノゴトクニ
ツヾケ俳ハ眼到ルニヨリテ
○此書ハ級鏡ノ言例ヨリ效ヒテ本句ヲ擧ゲ備ヘタル
中ノ註ヲマヅ級鏡ヲ本トシテ
○右ニ云ヒシ如ク徒ノ多クハ雜中ニ云ヒ我ノヤ何ノ多クハ雜
左ニ云ヒテ我ノ多クハ辭ト初メ
○モノ多クハ云ヒシモノヤ
ビ。本句ヨリ枝句ヤ葉ヤ
ヤヲ多クハ辭ヨリ初メタリ。本末ヲ
ヤヲ多クハ辭ヨリ初メタリ。本末ヲ

ヲ往ハシニ此書ヨリ畧ス
○右ノ懸リ四拾三段ノ辭ハ
多クハ四十三段ノ辭ハ續ケ
○我トヤヲタヾ何トゾヲ
ノ故ヲモ〳〵ノ如ク
キハ此書ニアラヌ俳ノヲ學ビ
ヲ擇ビ

級鏡圖式證句

右

毛	徒	中	で	の	や	何		
左	去	我						

現在志

屋	東							
う	よ							

同き

屋	東	き						
う	よ	き						

同久

屋	東	き						
う	よ	く						

志	山里	志	筆	筆	お	我	梅	芭蕉
も	白魚	の	志	志	志	志	志	芭蕉
徒	志	石	の	止	芭蕉			

中同き

で	手	折	く	人	淚	で	枯	き	秋	の	雲	芭蕉
の	家	折	折	く	出	て	花	の	雲	き		飯順
や	筆	を	た	く	白	魚	や	有	く	行	秋	き	芭蕉
何	筆	力	を	志	山								芭蕉

左同久

志	色	と	志	花	く	久	移	多	櫻	花		無載

貳段

壹段乃辞いきくの格と云ふ。
中いき左そきを述て例くあるを現在のきくと云

右は も 徒

此貳段の辞いきくの格と云ふ。右いきを述てきくと有るを現在のきくと云ふ。

中ぞの や 何

幸きの二言絢んいきを有る辞とやぞし。上より例乃絢いきを又のぐてきくへる例さ

左 こそ

現在志	うもーし	恋	ー
	まべーし	たのー	
	うもーき	こひーき	
同志き	まべーき	たのーき	
同志ゐる	うもーゐる	たのーゐる	

うもーし	と	ー	
うもーき	を	ーき	
うもーゐる	うもーや	ーき	
まべーし	ろもーき	ーき	
まべーき	ひさーき		
うもーゐる	うもーや	ーゐる	
まべーゐる	ろもーき	ーゐる	
	ひさーき		

右現在志

は 柳さ雪苔さ ー 芒薄 芭蕉

を いろくの名 まきく ー 秀の字 和訓

徒 蛇ながら少けいおそろ ー 雉子の声 和訓

中同志き

ぞ こそなしと二人旅寐 志き 芭蕉

の 井の中の児我蚤 志き 嵐雪

や 卵あいてび小鍋 中は 志き 蕎麦 東流

何 掛奇も いうよ ろる 雑炊ぬらを 擧白

左同志ゐる

乗 元日ふ田舎我日 ろう 旅 こひーゐる 芭蕉

三段

過去き　志い現在の志きと入替りて表裏あり。初学のまぎれ安き辞なれバ能く考へ定べし。

右は　を　徒

現在の志きハ志きくと志きく志きく志きくの故と。此過去の志きハ志き志き志き志きの故と。此四位の音やうけてきと志きとハ同じ。志くハ志くくの故也。過去の志きハ志きかと志きとハ同じ。

中　ぞ　の　や　何

左

て　我

過去き	同志	同志の
え き ゆ き いひき うけき おえき をてき	見 ー き ー あり ー おう ー いひ ー うけ ー おえ ー をて ー	え ー う ゆ ー う あり ー う いひ ー う うけ ー う おえ ー う をて ー う

三段　右過去き

は	い	泝	き	能然
乙	安	也	も	持たり　き	南甫
徒	志	の	風	翻	物	き	季史

中同し

ぞ	志	物	哉	是	う	ー	野童
の	思	ひ	草	毛	の	心	ひ	故	也	ー	素秋
や	風	を	ほ	ひ	や	は	き	ー	帰	り	芭蕉
何	な	ー	何	も	形	体	る	い	る	を	ー	翁汁	如	形	ー

左同志り

て　我

き	う	ふ	て	我	為	の	業	の	梅	翁

四段

此みきみしも過去の志の指す其位と四位とうけてめり。過去のきよりをそつる辞とおるべし

右 さ も 徒

中 で の や 何

左 て 我

こゝも詠めて右左の例形り

さりみき たえみき		
	さりみき れみき	
		さりみき こえこそ こりみき まじみき まてみき
さりみや たえみや		
	さりみや れみや	
		さりみや こえも こりみや みみや まてみや

さ	菜大根よ妻さ	軒半
も	我らこそ富士も	胡園
徒	義業討ふ次郎老	梅宇

中ふ

で	碎くで 我	桐の実
の	波乃陸業苦	幾葉
や	鶏乃つみ菜中 放生	南甫
何	いくさを我時自治え	加丈

左ふ

我	雪形うこそ我 来	梅の実

五　段

此てき・てしは過去の詞の格く。貮位と四位との音をうけていへり。過去の字
てきとよむ辞と知るべし

右　も　も　徒

中　ぞ　の　や　何

てしは過去の詞にてもてしと也。梅鏡
てしは過去の詞のてきの語也

左　乃我

てきしたれは動くいふ過去の詞にて
年は経ても引給し　春乃暮
話順

てき	てし	てし
いひてき 拾見てき 言ひてき うけてき	いひてし 拾めてし 言ひてし うけてし	
ありてき もててき おちてき うけてき さしてき こえてき	ありてし もててし おちてし うけてし さしてし ちえてし	

五段　右てき

も　人丸も雪ふりいひてき義乃賀　梅翁

も　二つ手て笛も吹いひてき　路十

徒　要千歳乃剣柴のめてき二月日　且旭

中てし

ぞ　松植て雪の降りと我思ひてし　松濤

の　呼くもおとし人のいひてし開古香　皋白

や　人乃命をしやそ惜しらてし　嶺順

何　風の鶯声なに天到まてし　巣力

左てし

乃我　月終手稀てぞ始けてし雪明り　卍々

六段

此ぬを不の意と。又志を『そのまさは』
『ぬ』とする意もて俗言まいまの
意と見る

右 も 徒

とゐる梓え『せ』『ん』『ぬ』の意と
志と見る

中 で の や 何

此段迄以上六韻ゐて過現未の例格
備ゐ『り』『き』『む』『ず』と云辞ゐり
ぬと見る格と知べし

左 て 我

ざ 志	ぬ	祢

六段

右 ぜ

も	芭蕉
梅の香	芭蕉
神垣や	おねゐ
夢	及肩

中 ぬ

で	梅翁
時鳥	梅翁
猫の恋	鬼貫
古格子	芭蕉
簀の雫	曽良

左 祢

煩ひて	芭蕉
鬼の子	芭蕉

此段双鏡まで有居が二格のてにをはづかひなるいつゝきのてにをはの活用ぬきやうの例と知べし

右	中	左
を	で	てにを
も	の	
徒	や	
	何	
ま		あり
る		有る
非		有ル
有ル		在ル
在ル		

てにを	中る	
て	で	那須野を	杉風
も	雪舟引や	使ひ	も	雪ふまでを	亀洞
徒	鴛鴦や	岩を	屏風	よこたはる	柳居
	中る				
で	那須野を	狩	暮る	大晦日	吉貞
の	初雪の	日	捨て	笠ふる	夢太
や	沈の雪	鴨や	起へ	雪あけて	千代
何	炭もまた	なき	梅の	香る	祐甫
	左ま				
乗	疲れて	来れ	春の	月	梅路

此段乃せりせるを下四段のせりとふ
妄くさの辞の為(シヽ)為(ヽヽ)為の延音ありて
古今ともに殿つくりせりのたぐひ
て為(シ)の延せり為(ス)の延せるとおぼし

右	中	左
そ	で	て我
も	の	
徒	や	
	何	
せり	せる	せ北

右せり

そ	野	よ	霧	分	海	立
も	山	も	立	游	きり	雨
徒	妻	ふ	い	ろ	協	為

よ 事 て 園 生 きり 中納言國信

中せる

で	折	と	独	い	見	労	り	で
の	妻	の	用	事	人	の	生	在
や	山	畑	麦	莽	や			
何	指	簑	よ	何	の	味		

左せル

我	雪	を	て	我	折	ま	ふ	ル

莽の妻 曽 光

九段

此段は右左中でのやうに云捨いたしてみたり綿とさゝべし斉ナ

右	左	中でのや何
九段	右もち徒	
	もち	もち
	もち	もち

九段　右もち

右	旅行く人に云捨たる	第古き名 柳居
もち	和しうち神楽をぬすみけく	芭蕉
徒	途中の意平仄日ぬり更衣	嵐雪

中もち

で	娘の髪は切ても我	もち 杉風
の	雲の梅老木ぬ	もち 杉風
や	鉢叩きも	多都 蕪村
何	寺柳に何所ぬ植てもち	千代

左もち

我	白魚や價ひもち我	芭蕉

拾段

此たりたること云辞に本言てたり
ありてなかに言ひ始めてたの一言と

右 も 徒

あてたりたるといいてり。さるを由
世乃説士の多く現在のめ〳〵用ふに誤し
ありてあり中間よあ音乃ぐ衣
ふあそそぶきて去ざるに大御國か

中 で の や 何

言令こ。奉〳〵も事いひびきの玉
よ注きり

左 古 我

たり	たる	たれ

右たり

も	孫よ	宗瑞
徒	梅ぞ匂ひそ	芭蕉

中たる

で	門涼しき分よ	貸衣
の	水の書き	千代
や	月の雫や	従吾
何	海棠や	暁臺

左たれ

五月雨よ松う | 我 | 来 | れ | 良寛の者　関白信尋公

拾壹段		
右	中	左
右	ぞ	古枝
も	の	
徒	や	
	何	
けり	けり	けり

右	中	左	
け	ける	北枝	
の	敷なりて	鬼貫	
や	角をうむ	や	蘭々
何	茶もい	たゝき	酒の畑
	左けれ		
乗	名ゝよき	春	松まの雪

其角　宇門

凡てりそを拾貳段乃中せりりめり
ゝ二格乃ら中上略るゝ爲ゝ爲の延音

右	さ	も	徒
	せりせる之。爲去りきの延りりる		
	よそめりめりいむり特ゑゝ下略るゝ		
	又受ゑ凡ゝるの度ゝよ行ゑるそえて		
	糸ゝ亭ゞし。牡蠣ゑゝハ重ゑゝよ後		

中	で	の	や	何
	君を隊て行きり			

左	て我ゝ		
	めり	める	めれ

右ゑり

さ	年の内よ	来ぬ	め	り	豊岳
も	窓ゝ松	も	續の浦よ	めり	季吟
徒	去ゑ	冰の上	年	ゑり	和之

中ゑる

で	花よ	風ゑ	で	ゑを	早仲
の	郭公	杜史	鳥	名	の
や	冰室	め	ゝ	出ぬ	ゑゝる
何	何	ゝ	て	初ゐ	淡雪

左ゑゝ

我	掬ふ	て	我ゝ	汗水の	雫ゑ
					め

富士の雪　左十
一ツ鷲　喜界

拾三段

此段カリ〳〵い拾壹段のくに実あり。休詰とり也にてはをもをあれ

右 も 徒

ものおもてきくの延音くやきのきを延てい
ひかりくあり。ゆくのくを延てい
ひかりくあるくをくぐ。奴銭よ本居
が注るごい初学の為ぐくかれい隆
よ別注を加やまもをも

中 で の や 何

左 こ我〳〵

け り	け る	け れ
き ゆ さ い か	笑 咲 書 書 書	行 り 書 書 書
け け け け け	る る る る る	る る る る る

右 せ り	中 せ る	左 せ れ
右 て り	中 て る	左 て れ
右 へ り	中 へ る	左 へ れ
右 め り	中 め る	左 め れ

拾四段　八段のそうおーくこまり

拾五段

拾六段

拾七段　拾弐段のそうおくこまり

此五韻の證句少くれい一ふ交へたく秀ごを辞の墨縄よ註ず

え り	け	芭蕉
も り	け り	暁臺
徒 り	小笠越え	蘭更
徒 せ り	行の雲百里の厩つ	芭蕉
徒 せ る	春さらく や岸の巌か	嵐雪
の せ る	苔むさ き	一思

もてり　もてり　もてり　門の松　嵐蘭
もてり　もてり　もてり　嗚のや　指の垢も　もてり　馬六
もてる　もてる　もてる　香の骨の　名よ　もてる　もてる　蓼太
徒へり　徒へり　徒へり　砂もも　潟人云　徒へり　春の雨　闌更
徒へり　徒へり　徒へり　名よ　弥　つゆ　羽折る　芭蕉
何へる　何へる　何へる　つゆ　の　森　笑ひ　雲　おれ　おれ
何へる　何へる　何へる　肉　つゆ　鮮し　志川　雲　海の底　おれ

此格の辞もおもてをそらし受けり。拾三段めり。
咲き聞き　あるのきを　延て　咲くり　聞くり　聞くり　咲く
みるを　延て　咲くり　聞くり　拾四段めきり　潤し
見透し　あるの志を　延て　潤きり　見透きり　見透し

の辞を延て　生きる　云ふ　拾五段のてり　てり　い云ふ
持ちれる　のちを延て　きてり　おてり　おてり　い云ふ　持つ　つを延て
云てる　おてる　いひ拾六段のへり　てる　い言ふ　酔ひ　そのひを延
て言へり　弥てり　といひ言ふ　酔ふ　おのふを延て言てる　弥てる
いひ拾七段のそりめる　染むのもを延て　染めるやて
めり　染めりといひ沈む　染むのもを延て　染めるやて
云てるひく。此辞廿四段の　仮字引きて　聞き成有
立有と　投るのてり　言さんてる　仮の例
てる　辞の本言を　説んてるひく　義訓仮の例
おい辞の八重機　年　注てり。　是等　猶へ志てる。此六類
延音あるすを　却ぶ　いリルレの本例を　きて事　阿さり

拾八段

九てつゐれ上下合て拾弐段なり。
皆同一躰用あり此躰も定まる字り

右 毛 徒

無うものりを定て守り越りう
と沢寺越うのうを定て守り越り
ふをとこと教のおひうそいきるを
学得てれ九れ九れめ九
ぬりとそ出その意

中 で の や 何

左 て 教

まり　まる　まる

なれりつもれりちれうてふれうまれうぬれり
なれるつもれるちれるてふれるまれるぬれる
なれるつもれるちれるてふれるまれるぬれる

拾八段

右 ぬり

毛 相の葉をそめて毛守 毛 庵を意の ぬり 名の宿 飴順
徒 名をとき出て前を志名 まる 言水 鬼貫

中 ぬる

で 空をやる霧 で 外 まる 美枫 飴順
の 面をきて月 教 う 教 る 杜深 雪孝
や 書塗りを や 成 書 かいつき 致畫
何 空 名 伯激よ筑 書 蓑月宝 卉卅

左 ぬ

乗 風み て 教 き て 薄 毛 花の雪 岱水

拾九段　右ぬ

右	左	
ぬ	ぬる	ぬれ
なりぬ	なりぬる	なりぬれ
たえぬ	たえぬる	たえぬれ
来ぬ	来ぬる	来ぬれ
まどひぬ	まどひぬる	まどひぬれ
ふけぬ	ふけぬる	ふけぬれ
おちぬ	おちぬる	おちぬれ

此ぬい例よ平乃ぬと以て。成形乃言く。此辞ハ過去現在の間よ云言

ここて貳位と四位の言乃過去乃言をうけまつりて。言一ろく辞のハをもてよ註ひり

中で　の　や　何

左　て　ま

拾九段　右ぬ

右	中	
ぬ	ぬる	ぬれ
未ぬ	未ぬる	未ぬれ
也ぬ	也ぬる	也ぬれ
毛ぬ	毛ぬる	毛ぬれ
徒ぬ	徒ぬる	徒ぬれ

未ハ未ん毛ハ毛ん徒ハ徒ん

中で　の　や　何

左　て　ま

貳拾段

此つゞく現在と過去の事を云辞とて貳位と四位乃者の現在の者をうけて
そうゝ。等こゝ辞のみ八重機乃
註ゆり

右	中	左
之	で	こゝ
毛	の	
徒	や	
	何	
つ	つ	つゝ

右つ

もゝ	をゝこゝ	之	川	流雲	去来
毛	丹波路や	綿の花の	毛	乃	つ	闇更	芭蕉
徒	観音の	甍見え	つ	ま	都そら		

中つゝ

で	世の	為を	海ま	我	乃	鰯雲	布山
の	菅おふ	八束	穂乃	川	流	つ	朧岱
や	友ふそ	来て	や	雪	毛	菜の	仙风
何	いつ	海の	波とみ	乃	浅	芳清水	萬比

左つゝ

こゝ	牡丹	こゝ	我	ぬ	きぬこゝ
つ	ま	咲こゝ	哉		

立祇

貳拾壹段　五韻混交

此段の辭ゝ壹音轉ゝ以て左へての捺ゝ云ゝ。春ゝ云ゝ辭めハ主據ゝ在ゝり

右 も 毛 徒

中 で の や 何

左 ろ 我

為來得窺經

貳拾壹段　此段乃證句少ゝもろひゝ一ゝふゝゝ

徒 業の香や埜の起ゝおこもの寸　芭蕉

徒 鶯なきて初ゝうゝ和哥の浦　可水

徒 かれ乃風ゝおよりて　や　渡ゝり　ゝ　弓月

徒 家近ゝ高　も　まゝひゝく　雪ゝゝり　岱水

も 松の葉ゝおもゝ　ゝ我　ま　山ゝ水　桐之

も 有ゝ明ゝ　も　ほゝゝゝ　朗明

も 額ゝ新ゝゝゝ　も　菜ゝ　寸　初櫻　桂甫

で る 茶をつゝゝ行けゝ我　豹旅窠　ゝ　龍重

の る 蚤虱馬　の　尿　ゝる　ほゝゝゝ　芭蕉

や る 咲ゝゝゝ傳役　や　ゝも　青ゝ句　鳩峯

ゝす ゝゝ 松の葉ゝおもゝ　ゝ我　ま　山ゝ水　桐之

も 家近ゝ高　も　まゝひゝく　雪ゝゝり　岱水

徒 鶯なきて初ゝうゝ和哥の浦　可水

や る おれゝの風ゝおよりて　や　渡ゝり　ゝ　弓月

岩清水	梅順		
花蝶	年路		
重呂	杉風		
梅仲	信高郷		
山亭	鮎順		
梅翁	梅貞		

此五額乃辞共ら詩言乃活用ら会ち右ら如おの生ぐる事ありをしへ、また壹音語し仮り名をし拵ら。扨ら為（ヒつ）為（ヤセ）為し轉じ来（キク）来来と発ば。又得（カエヌ）得寐（ネて）寐経（つヘ）経と発ばるら如斯壹音ちて我ら辞世おるいなもの多ありり。右ら天迹表波乃受けち諸言ら委形ら拵あり。史言乃我活用乃あしへ門人源乃季隆ら著ら處乃辞ら墨縄ちふ史ら明ちり。扨ら重ねまちを知へむかしあへばおら発ら辞乃八重機ら古歌を誘へら助けて古言乃平ら切ら志ちへむるら於ら。言義い容あへざれい混りやすへ多へ世内得得ちて詞ちちちへ編あちりいと多へ世内得得ちて詞学ちひまの左ちよりぬ詞ど誹句ら左ちちちへ乃八物左ちを扨事を知へぐへ。

貳拾貳段

此もの本言令よて令旬ハ令知ると
いふて辞し。此拾ハ第一位乃音とり

右 [そ] [も] [徒]

うそう例えきうを級筵ま著に見
もの二言をぶん。誤りこおよへ此本
を分てま誤を消白に此辞
著為見よて上五韻の為こ此貳拾

中 [そ] [め] [や] [何]

貳段を加こおるい著ざに見さん
こ壹位のさもとうざんがたぶう。
辞乃霍縄ま要ー

左 [こ] [我]

[そ]

[そ]

[そ]

[そ]

[そ]

[そ]

[そ]

[そ]

[そ]

右 [そ]

[そ] 妻う我をくよま [ま] [つ] [ゆ]
[も] 毛見えぬ雪も [も] [白い] [ゆ]
[徒] 旅人の森耳よゆう [ゆ] [雪] [ゆ]

中 [そ]

[そ] 秋来ぬと妻で [で] [さ] [つ] [そ]
[め] 葉の芒羽さつく [く] [ま] [の] [薫] [つ] [す]
[や] 妻来ぬし梅 [や] [さ] [つ] [そ]
[何] 君よ赤 [そ] [ま] [つ] [そ] [う] [着] [さ] [そ]

左 [こ] [我]

[我] [こ] [ふ] [そ] いま梅見さ [さ] [そ] [ま] [し] 菓の [の] [そ] 潮鳥

右 さ も 徒

中 で の や 何

左 て 我

△此外七首ほどの仮字さし添ふべきが如くなれど此段の誤りにや。

乃辞い第一位のるよりうごき始む。祥の墨縄をうてゝ其ゆきをおもふべし

さ	る	ゝるゝ
ゝるゝ		いまるゝ
△まるゝ		おもゝる
		拔ゝる
		うまるゝ
		さゝるゝ
		ゝるゝ
ゝるゝ	ゝる	ゝるゝ
いまるゝ		いまるゝ
おもゝる		おもゝる
拔ゝる		拔ゝる
うまるゝ		うまるゝ
さゝるゝ		さゝるゝ
ゝるゝ		ゝるゝ
ゝるゝ	ゝる	ゝるゝ
いまるゝ		いまるゝ
おもゝる		おもゝる
拔ゝる		拔ゝる
うまるゝ		うまるゝ
さゝるゝ		さゝるゝ
△まるゝ		ゝるゝ

さ	人あてゝさ又道ゆくふ	る	箸の杜　湖峯
も	茶呑ゆもまやまふ	る	也川屋　東暎
徒	始末ぬとまふ	る	生蕃の酋の首　東順
	中る		
で	泥紙衣花の着	で	おもい　る　巴明
の	矢はしきくの	ふる	梅の花　契嘉
や	はくふんと雪や	る	杭の雪　蘭景
何	拔う雪や何雪	う	雪女　千代
	左 て 我		
我	花う	て我	人ふふる
			薄の戸　蝶友

貳拾四段

○此字やなくらいたゝきよく行りて自地の二拍ひろく染あり。解もて

右 も 徒

中 で の や 何

左 古拍

右 く

た 時る 待 得し 浪 も 蟻 年

も 京 も ゝ ゝ 都 も 山 も 葉 越 我

徒 引 江 の 待 や 神 戸 し の 責 を ゝ 杉 風

中 ゝ る

で 幸 橋 一 四 別 京 和 で 唄 ゝ る 萬 化

の 座 庫 や 道 正 汐 の 和 ゝ 一 聲

や 吹 方 の 琴 や 琴 ゝ る 鶴 鴿 惟 然

何 き ゝ 月 の 能 を ゝ る 峰 の 杉 鉦 順

左 ゝ る

乗 高 松 ゝ 和 ゝ 琴 ゝ 於 ゝ 九 ゝ 琴 の 声 舟 順

右 も 徒

中 で の や 何

左 て 於

す	する	すれ
まうす うす おそす やす のす うす	まうする うする おそする やする のする うする	まうすれ うすれ おそすれ やすれ のすれ うすれ

右す

も	遠道を	夢見は	す
も	よく	も	久まく
徒	淀川や	日も	すまう

芳成

			す
			水車

正方

			す
			夢の

千幹

中する

で	春風を	京で	する
の	おくらや	朝くら	風の
や	月の	出汐	香も
何	岸や	何	はうする

仔勢の海 波竹

			する
			香もする

東圭

左すれ

於	能も	福よ	月

			於
			能も

			於
			咲出くる

良海

			於
			波の

古仙

桐葉

貳拾六段

○此下を自らん自他二格の辨と云べし。立はたつたつると云分るをおきとしろ意なれば他格と云たてと云分るべし主意なれば自格と。是等の事は墨縄に委し

右	中	左
も も 徒	ぞ の や 何	こそ
つ	つる	つれ
たつ いつ そつ えつ ちつ おつ	たつる いつる そつる えつる ちつる おつる	たつれ いつれ そつれ えつれ ちつれ おつれ

貳拾六段

右 つ

も　月も朧に仄かに梅と香かな　專那

も　行過し音も月もいづ蓮の上　樂山

徒　思ひ立つ清水の峰峰の若子の楽　宗圓

中 つる

ぞ　寛永ゆかしきぞ残されたつる　蕪守

の　木枯の吹きまくれい日のお待る　南籬

や　角落てかやおつる鹿の皮　近之

何　何思ひ出して桜のちりきつる　幽窓

左 つれ

こそ　見さかしき月こそいれ網代守　牧童

中

右

左

ぬ	ぬる	ぬれ
いかうたづぬ	いきうかつ	いきかたづぬる

右ぬ

を	宇倍を	之歩て往	ぬ	秋の暮	鷺	重			
も	山〳〵も	秋き衣ふも	ぬ	霧雫		水			
往	元日や	雪ふり	ぬ	新年中		明	南	羅	十

中ぬる

で	下戸ぶり	陳	でぬる	重	老				
の	持〳〵の	翅	のぬる	哉	の	月	曽	良	
や	学問の	雛	の母	や	寒	夕	哉	佳	山
何	戸も	作て	何雪へぬる		笠	の	主	素	心

左ぬれ

乗	乗もぬる	月ふ	乗れぬる	月	飯	汁			
					古		明		

貳拾八段

○此句を村こゝろ自他二格ありて紛はしきあり。陳ハそを我ものとするこゝろ自格なり

中 で の や 何

右 む も 徒

左 ふ

○神ふ
○古ふ
おふ
こゝのふ
ありがほふ

○神ふる
○てふ
おふる
こゝのふる
ありがほふる

○神ふれ
○さふれ
おふれ
こゝのふれ
ありがほふれ

右 ふ

も 徒 且州
を も 芭蕉
お ふ 自ら 梅
さゝ 雛 雞
ふ 雄も川 僊崔

中 ふる

で 於以昼布を朝きも夏で こゝのふる 帆路
の 晝の霞 霄しる 雄 のも 雨峰
や 梢那こゝ 歟 や そゝふる 濤岩
何 あるを事を ふる 七草葉
あるふる 暮の秋 兎十

左 ふれ

義 船ふるをいへ 雨 岳翠

貳拾九段

○叫喚を身とうに自他二格の辭あり。
我人をたのむ時いたのこたのむと云

右そ　も　徒

自格也。人我をたのむ時いたのむ
たのむこと云他格之。除いおのづ
乃時そそむそ名と云自格之。物を
除く時いそむそ名と云他格之。皆
茅のてにを梓の墨傳を考へ

中ぞ　の　や　何

左　こ　我

む	む	む
○たのむ なげむ ○我も 心ぶむ ふるむ きむ	○たのむる なげむる ○我もる 心ぶむる ふるむる きむる	む

貳拾九段　右む

そ　事ぞや花ぞと春て　宿をのむ　奇嶽

も　露も我こ雲も又そ　如帚哉　蘭我

徒　然草つれ　芭蕉

中むる

ぞ　多栗姫る松我　むる　香る葉　月歩

の　はゝくと人の　むる　長う痴る　類々

や　月来ぬ　もや　むる　き片こ　寛志

何　ゆゑぬ春そ　ふるむ　射る　楷良

左む

我　咲て　こ我　事も我　む

む　か　何そそ　宗普

三拾段

右 も 徒

中 で の や 何

左 て 物

ゆ	ゆる	ゆる
んゆ ナゆ さゝゆ きゆ たゆ おもはゆ	んゆる ナゆる さゝゆる きゆる たゆる おもはゆる	んゆれ ナゆれ ちゃゆれ きゆれ たゆれ おもはゆれ

三拾段　右ゆ

も	法の中ゆるされ	も	ゆる	了然
も	雲の峰ゆるぎなく	も	ゆる	其明
徒	三人も九句ゆる	徒	ゆる	仙美

中ゆる

で	思ひ立ゆるされ	ゆる	ゝ	梅翁
の	十六夜や雪ゆるの	ゆる	佃坊
や	旅人の荷川ゆる	ゆる	曉堂
何	梅の初ゆるさゝ	ゆる	芭蕉

左ゆれ

乗	雪ゆるゝ内ゆれ	ゆれ	杉夕	野棠

三拾壹段

中 で の や 何

右 と も 徒

左 て 花

る	る	る
なぐる かくる みぐる きぐ〳〵 やはる きほる	なぐるれ かくるれ みぐるれ きぐるれ やはるれ きほるれ	なぐるる かくるる みぐるる きぐるる やはるる きほるる

も	影 も	茅ぶきの家 る	銅石
も	入仕舞ふ用ろ	花 と	まるる	芳美
徒	和ろやろの母	子	る	岸久

中る

で	杜風よ吉	我	る	琵琶の湖	光玉
か	物風や家ろの	数	ある	る	木白
や	家あり	や	夕ふさる	る	闌更
何	付い来て	何	変ろ徒	ふろ	る	義當

左る

我	ちまき	八	我	雲	る	山椒	岱船

三拾貳段

此段とりて上皆三行あり

右	中	左
そを徒	でのや何	我
う	う	う
植飢	植飢ル	植飢レ
う	う	う
植飢	植飢ル	植飢レ
う	う	う

三拾貳段　右う

大川あやはらを植う笹間舜々

も舟をおとろも舗ま飢うれど雪龍志

徒をつりと楫ま風吾うゐ嘶ききお抑荷

中う

で学ぶうう寒をで植うる如川

のようあるて池附形人の菜植うる半路

や舗ま飢うる和風やつつまで菜うる窪賀

何永き日やみぞ夜更ふけて石花うる松嘉

左う

我半ばしさみ降て植うれ月や雪朗水

是らの假字は皆三轉して、たとへば徒の受辭は切る語ぞのや何
が受辭は續く語と別れて拾ふの受辭はなは過去の志志る語と
いひ、るは皆連体により兵中なくもつふむゆるらの辭を
うて下貳轉の辭をもてつふむる乃同音轉りて初學のまつ
ごくるものなん。三轉のうちは未來る又解く解くる掛く掛くるなど
三形るの辭なるてうしへ下貳轉の辭をば聞く行くの未然ながらひて
きうくる。かくるなぞれはなれどもそれ辭なれば、まゝしきけ。也くゆけ也し
轉る辭也。さて是まで委しく云ふべし。又貳轉の語はまた徒
ぞのや何もまた一つまとうけて結ぶ辭なれどもかなかくを
ろて無へ數くなし。又三轉の辭は志きしく志志き志志く過去
のき志まきなし、てましぞぬ辭りるまなの三轉也。
現在の志そ切るきは續き過去なきは切れ志は續くなき
てきは切れなしかば續きぞ志そ切れぬそ續き了は切
れるは續く又又くそつぬふむゆるらて皆切るゝ語の辭
まてるの助音を轉しみれは續くなる也。志の切る語の
辭りと云はまへ言ふとも徒の結辭續く語の辭は皆ぞのや
何の語は辭と知ら所は紐鏡四拾三段の辭をよくかへりみて
初學ひとりもなり。又此以下くそつふむるの六段は也く
されと別なしといひてるは轉りかりぞうしれ辭まて也けさせとて
と四音に轉る辭まて切も續くもなる辭なるが故にそも
徒ぞのや何の結りし辭を一つまうけて結ひと形る辭なる
事圓式と本句は又て無へ去りぞ尾しる轉の結ひまとる皆
四位の音に轉る形了。是等の要しきを了く知るむるは辭の
墨繩をと與んつべし

三拾三段

此段より以下六韻ハ右中倶ニ受け辞ハ字ヲ圓のごとし。上九段の辞なれバかくかくらうもらうする亦どれひとつの持ふる辞

右　[九][も][徒]

中　[ぞ][の][や][何]

[く]

此六韻の辞ハきくきけうつれろりとを持してるハ移りうるときたとへバしれぐして辞の移ひてハ四位の音を持る

移くべし然れバ意ハ三位の音を用ゆし。今言ハ隨ふべし

左　[て移し]

[け]

あく	ゆく	来く	く	けく	○ひく	吉ぐ	きけ	西け	け	さけ	○とけ
やく	いく	たく		ちく	まく	もく	やけ	いけ	たけ	えけ	まけ	もけ

三拾三段

右　く

九　山茶花はちりかゝりひら[く]嵐り花　車庸

も　日くらしや盛[も]まゆ[く]蓮の松　蝶夢

徒　梅が千や花の芽りをそ覚ゆ[く]　芭蕉

中　く

ぞ　年のいちさきひさ秋足袋[ぞ]んせ[く]　月下

の　桜苗や声しぬ赤の薬[の]原そう[く]　芭蕉

や　麦畑をぬれて[や]あら木まみゆ[く]　千代

何　猫の恋[い]すまる哭みそもひゆ[く]　嵐雪妻

左　け

長　足で[て移し]命も続[け]夕まくみ　兎士

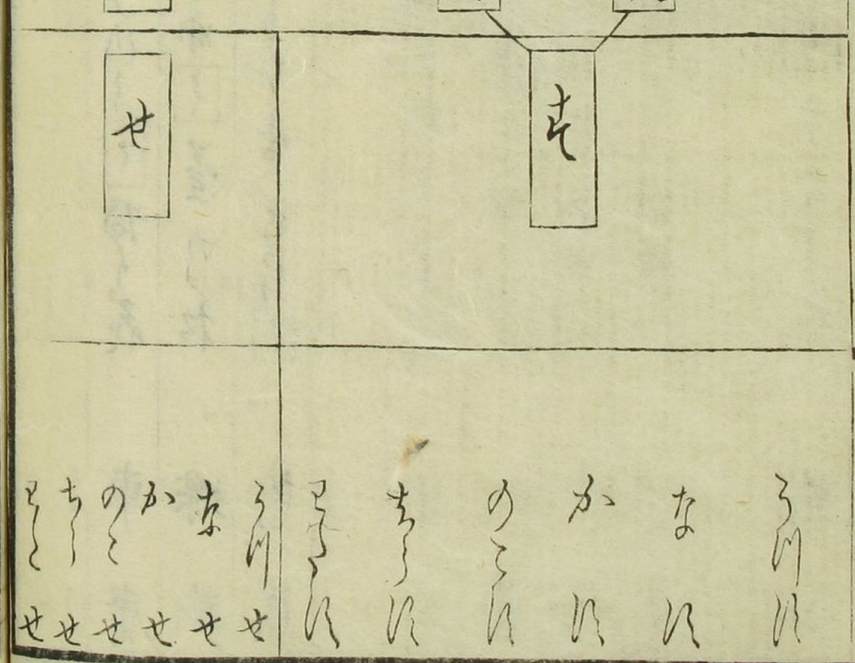
三拾四段

右 も も 捨

中 で の や 何

左 春

せ



右 も

も 葎や宵も 敲おろす 門の垣 芭蕉

も 敲ゝまろも 傘もる 専 阿

捨 妻こめよ翁さそのゝ 春雨の味 芭蕉

中 も

で 皆迷で 七角よゝ 苔 栞乞 影 良朴

の 淳めさの 月よおろす 西寸 名の月 杉風

や 宵右さゝ や 秋千 谷の家 句空

何 名月や 雲れ 吹おろす 雪 森の塔 洒堂

左 せ

春 杉の琴ろろよ 春 雨かせ 女七夕 明々

三拾五段

中 で の 穴 何

右 て も 徒

左 て

て

た ま う ろ も な ま

三拾五段　右つ

て 鶴鴿めけて も お ほ

も 春の並ふまゝ 也 も う つ 並 う 和

徒 鳴 敷 る や ふ ゝ 色 伸 ふ つ 小 杉 糸

中つ

で ひ り ゝ ま の 業 動 て 杜 で ゝ つ

め 業 ま て い 人 の ま た つ 抜 月

や 尺 う 周 没 ま や 抜 ふ つ 芥 な の も

何 吟 津 ふ ま い ふ 和 吟 ふ つ 附 ふ る

左て

義 業 ま ま や 矢 を て 抜 て

な て 業 の 杜

平 嵩

玉 峯

能 順

杉 風

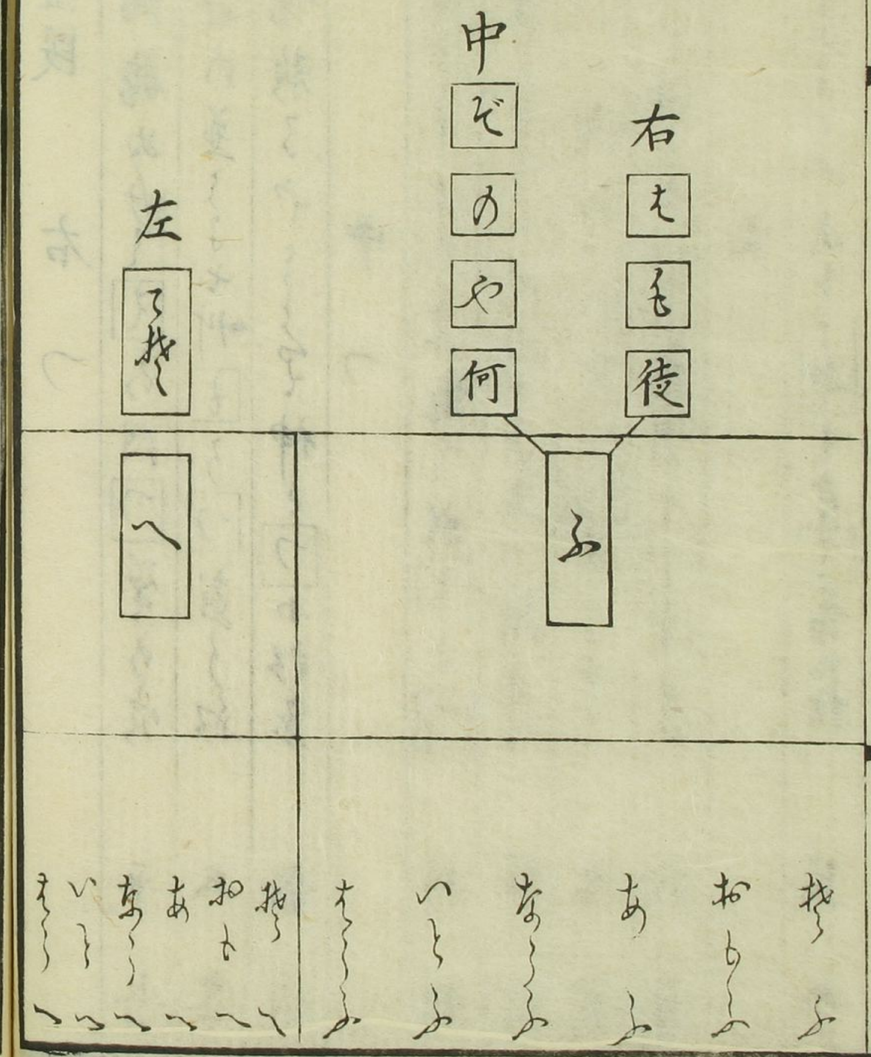
冥 冗

鬼 貫

鮎 專

蔦 命

三拾六段



三拾六段　右ふ

も　沼掛やりの口も　ふ　物の面　芭蕉

も　納屋や寐もよ　も　ふ　ふ　季吟

徒　涼しさや古葉をこぼす　ふ　松の雫　蓼太

中ふ

で　秋立や明ると雨も筆物で　ふ　百里

の　大蚊や蝶の　の　ふ　鋭月　丈艸

や　人形や　や　也の　ふ　芭蕉　芭蕉

何　仙壺莊大字人も　何　ふ　跨山

左へ

て　寐くたれ小袖の褄　て　我　へ　百角　百

我　寐くたれ小袖の褄　て　我　へ　百角　百　素丸

三拾七段

右 も も 徒

中 で の や 何

左 て 我

む

め

す む
す づ む
ゑ む
く む
い む
た の む

も ゑ
も づ ゑ
ゑ ゑ
く ゑ
い ゑ
な ん ゑ

右 む

も 別 も 乗 も 為 て 終 も 者 む 其 角

も 強 き め 奴 む 猫 の 月 む 百 里

徒 た 泡 や 誰 哉 古 む 多 年 音 芭 蕉

中 む

で 肖 で 壹 む 憂 の 古 む 哉 命 む 鮫 順

め ま の や 雲 の 花 雲 む 杜 若 む 抹 鴻

や 川 端 や 狐 や 添 む 雪 の 聲 む 且 精

何 五 月 雨 や 何 も 菜 も 汲 む 注 の 人 む 鞭 石

左 め

我 手 ま る ま の て 我 む 元 の ゝ む 重 霞

三拾八段

右 も・も・徒
中 で・の・や・何
→ る
左 こそ → れ

ある	志る	よる	くる	ちぎる	ちる
あれ	志れ	よれ	くれ	ちぎれ	ちれ

三拾八段

右 る

も　秋は若子[も]山家の[る]時鳥　正由

も　きのふ茂りけふ[も]又ちる廿日草　色山

徒　来りしや里の山畑打の来[る]　暁臺

中 る

で　桐[で]散[る]待所の風はらりと　休斗

の　陽炎や柴胡の糸[の]薄曇[る]　芭蕉

や　丹波路[や]小鹿も鳴[る]雪解山　雨色

何　行水や[何]にとゞま[る]海苔の味　其角

左 れ

こそ　道くへ[こそ]居まて留[れ]蝸牛　素輪

三拾九段

此段より以下五韻ハ三位の吉丸切ル
捨きをうめ扱めきの附ハまル
バ皆切ル捨きをうめるべし。

八重機子往切り

中 で の や 何

右 も も 徒

左 ら 花

ん

ん ゃ う ん
ん ん ん ん
ん ん ん ん
ん ん ん ん
ん ん ん ん
ん ん ん ん
ん ん ん ん
ん ん ん ん
ん ん ん ん
ん ん ん ん

三拾九段　右　ん

も　々ふうり　さ　書分治さ　ん　公三の表　芭蕉
も　物う花おしな　も　ん　延切も　其角
徒　えりや表ま徒うめ　右カもう　ん　鬼貫

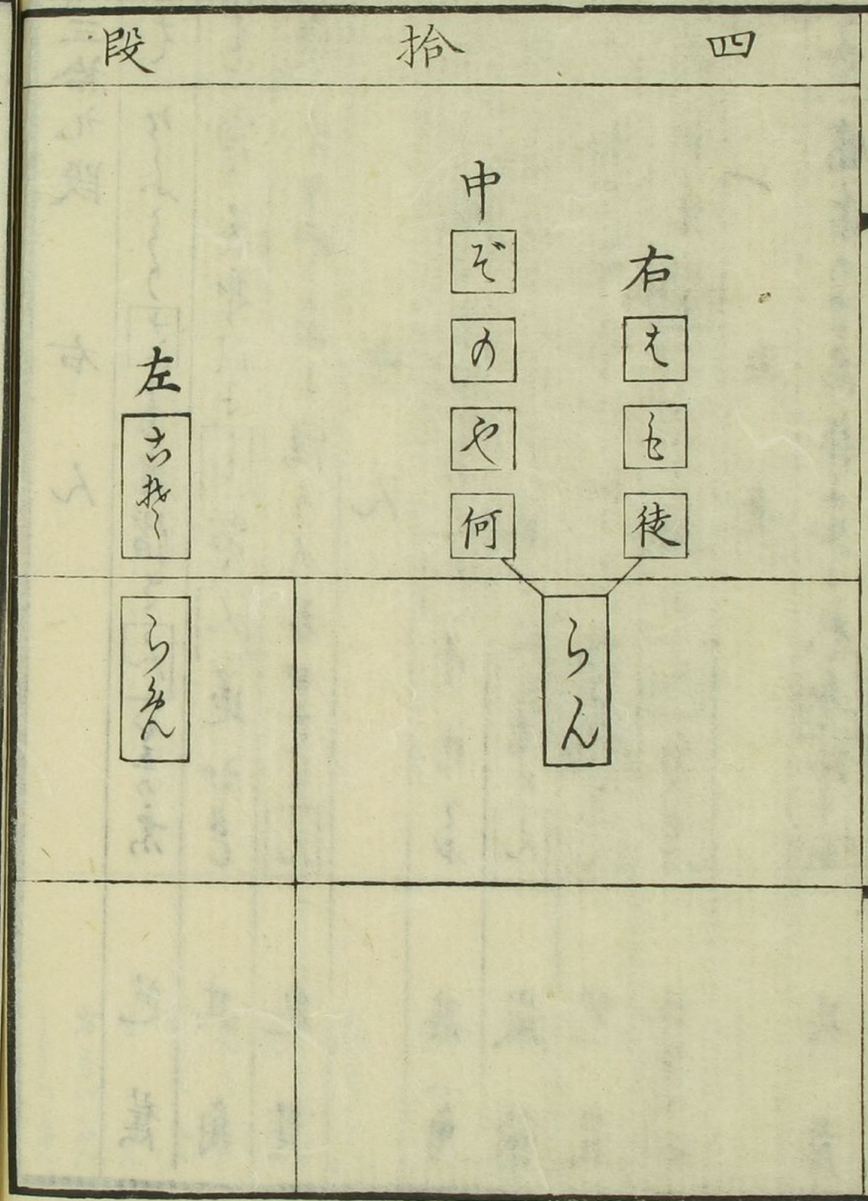
中　ん

で　岸燒の狗　投　あ〜　ん　冬のう　其角
の　なや。注うん。冬なり毋よ　蚯の唱ハ　ん　嵐蘭
や　和ま表ま。や切〜ん。猫ま布　そ　ん　芭蕉
何　り表い　中　う　ま　ぬま　ん　紅の表　作者不知

左　ん

雪盃のま苗植よ生う秋　春　行〜　め　其角

四拾段



もも	右らん		
もも	毎里ふもとも	らんとふの月	蓼太
徒	花見うき	深山の雪の消えぬらん	仙阿
	中らん		
で	志ゝ芥まい時ものを	で	受つらん
の	之を多佛ゆゑ尾を	抹	らん
や	きよろきの後や	きよろ	ゐるらん
何	長明うおを見つらん	蟹もらひ	仏我
	左らめ		
	雪く	春	始ゝてきものらん

四拾壹段

右 もも 徒

中 でのや何

左 うき

けん

右 けん

も 鐘会も 哉て出 りん 芭蕉

も ゝの月海月と浮きて 秋 りん 蘿葉

徒 風の吹義し りん 秋 寒い 星 如琴

中 けん

で 夕部の咲く 花 そ りん 千景

の 月秋梅のもり の ほ く りん 龍足

や 寒もと山や 雪 りん 一髪

何 ぴう か 時人よ 義 りん 石ほ う ん 李由

左 けん

義 哉よ 義 道の 体き 哉 きく ん 志 風志

右 も も 徒

中 で め や 何

左 て 我

ん

あ え

右 れん

も 焼 そ ま も 前 き ん ら ん 任口上人

も 新 栗 の 白 も 仲 ん 素法上人

徒 掏 そ ぬ く ま は し ん 杜若 唐 尓

中 な ん

で 走 も 色 よ 杜 我 ん あ の 上 畔 霞

め 杜 杉 の 雪 を 掻 の こ そ う ん 玄 吉

や 梁 会 計 中 や ま え ん 土 四 川 芭 蕉

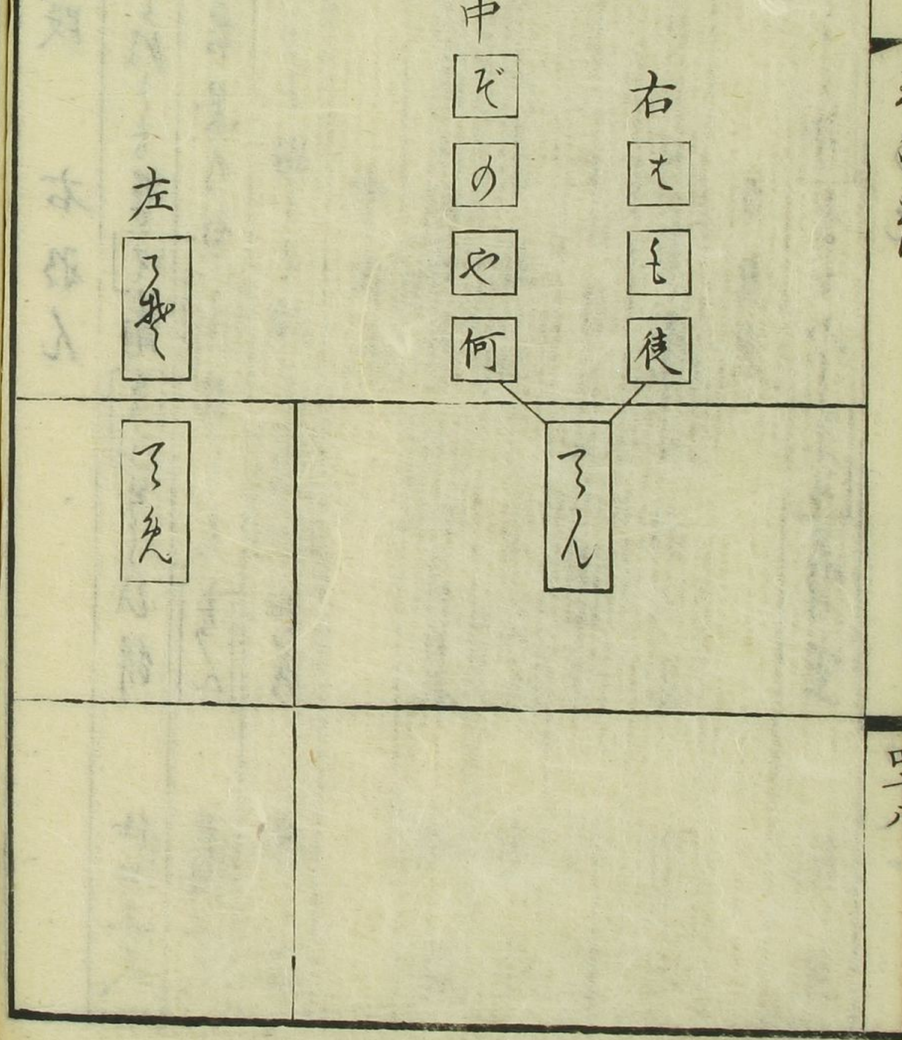
何 此 邦 も 以 ん 世 う 狂 ん 杜 の 若 おもく

左 あ え

我 で そ よ て 我 そ も の く

な め 春 の 宮 花 笠

四拾三段



四拾三段

右てん　峯旭
も面のはな接ぎをてん
もともてもてんもてんもあるてん菊守
徒てんてんてん形てんおてん自然の姿独鯉遊

中てん
で池にあってんてんてんてん和鮮露童
の青かきも月のてんてんてんてん文更
や篝火一筆やてんてん五月雨左來
何ぐてんてんてんてんてん花の裏貞義

左てん
乗月よて枝おもてめてん性矛花専順

落ちもの心と同じ格にて上もともも徒のありと知るべし。但し半にかかるつくは落
或はてにをは定まりたる事に係ると知るべし。推汲律にて委しく注すべし
○扨又用云不動言て下にかかり同言とはなくて動く詞にて云ひ出す
言又けりけるに留りうきなとありて皆天迹妻波とあ
る辞く不動言にも動き叙辞にてたとへば梅の花の
松の沖の湖なとといひてのしも下の言にかからぬ叙なり。
是を体云とも云ひの大ひの辞にてはもも徒代のや何て我し然
りても結ば辞ては及び皆此不動言にて落ひるとも知る
べし其證句をさしてすに記す

不動言の格

も	梅が香やきのふも[も]東にも[も]西	其角
も	不梅の香やかへる右[も]ゆりそ[波]	芭蕉
も	おのかれ[も]又採居し同し[寺]	杉風
も	出来さやなこの様り[も]このま[一]	利牛
徒	五月雨や隣へ無子[九木橋]	素龍
徒	七夕や秋を定むる始の[夜]	芭蕉
ぞ	珠寒きともも落流[ぞ][大松川]	野坡
ぞ	としあけは屠らする[ぞ][きりの底]	智月
の	樹の生る下や子供[の][三所]	利牛
の	庭風呂の下や菜の子の身[の][淡]	丈艸
や	きりぬ無て人も[や]年月の風の[屯]	洒堂
や	三てんむ実[や]かるる[大綬]	野水
何	雪の葉[何所]まてけもおなし[そ]	野坡

何	附る[何]も京き野の[門前]	凡兆
けり	されバこそ[けり]荒れたきまゝの霜の[宿]	芭蕉
けり	落付けも[けり]流るゝ人の[庵]	布流

如斯上下の語れの発り辞ありても此不動にてとむる附ハ皆語ひとなるべし。故ぞ何なぞハ此かな留の語なれどもけりとも略しぬ。てけるとぞどもなとらしむの語は皆云ぞそれらハ維波律に委し

切ぞや何けりの語

ぞ	立かりりと妻の仏[ぞ]神きれ	市山
ぞ	雲の日に尾をまつ[ぞ]けりさゝお	依々
や	見えにし[や]こゝちて菜花の初めしり	杉風
や	蹴鞠の老行にうし[や]附鳥	越人

何	某[いづこ]京もや土筆五七本	李東
何	笠島や[いづこ]五月のぬかり道	芭蕉
けれ	京宿ちり能き日まで[けり]乙馬	嵐對
けれ	初さくらまだ追ゝに咲け[ば]（タンシケレ）	利雪

ぬ折くぞや何けりといひてもすべ一ハ忘の類り作て切るかといふなり。読句とて味のひちなべし。此中に切るけりハアレタンシケレとかき拾ぬ云を治めていひの句例なる事を知るべし。故外ものにハ誹句にも殊に迷くまるや等やるつきや外との句といひ数百手切るやとろ切るハ誤りあり。先つ句の笠島やいづこやいはれし此ハれしとも云ふべし。先木のやと云ふきやすてありてもさくてもよしさきやあり。底に切れ当りせぬ辞まで笠島ハいづこと辞切れたり。故五月のぬかり道にさう紛義なりと句作されしもよく必その縁めのやまて切るとするとまひおびそ

や　夕顔や秋はいろ／＼の瓢かな　芭蕉

や　乃雁や花を捨ての世を嵐かな　嵐蘭

や　けしや知らず白髪を隠しけり　越人

や　山路や寄りむく跡の秋にし　路舟

ぬ新く上にやと置も切れも無りとするや有れハ添ひ辞のごとき故ハ皆ミて下の句にかゝりて言合せしく続ひより後の世の人是を夫へだてやうな右に挙る実なるかれハ夕顔の句ハ附子附合の設をなして句勢をしたハ皆これにたくさるゝ備と言ふべし然れどせ辞ハ法物なりて一揆にハ似ざりし。○上の辞下の辞の私用にあらひてハ差物を変ずる事いと多し。是言義活用あれバ所なり

や　氷洞に浮きや先やの葉かな　乙州

新く語乃字に二つまでも重ねて語の語にやの格本ハ切れも無りとせしして其辞を助けるもあまでもれる語てり。○又其の語にやるても我の用ひ

さ語に格を変じて無りなやうもなく是ハ以て申るくのやと有るとなり。○謂ゆ辞ハ法物なるもれてあるべし

や　夕顔や晒子や濡るゝ冬の宿　遠里

是ハ響や附や並のやなれバ字余り用ひさ語なりて格変してるへのやとなれバもはしく。○並ニ紋鏡三拾六段ふへの格まてふと結ひてやゝ形へたり。○是ホの称用初学能く来へ重く原きまて有り。○格又数甚のやてふ語り是も切るゝやの格子なり

や　浮しけれや風車売る花の時　薄芝

物に衆る附数甚ま是を成りきまして云。○なにあけきかやとてもいへり。○なれきこへる形し起このゝ示あるはれ。○これし詞中しも有るしきもて感せる附ハ自思と是く芸るなに形るハ起てゝふ平く。○摘なれさくハやとても後の世までハ形をこへてもまぬくるいへり。○なにろとめくいひてもかまの意なるこの

切り。又ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

か	おでくとゐる	滝の音　芭蕉

芭ホい初学い多しろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

ほろ〳〵もろ〳〵欲界を出る所あるをおぼえ。初又ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

いかゞ仮名を打ひら〳〵あるべき例之。其段切三段切あり〳〵向の雨ひのやう〳〵云俗

〳〵るも例拠を無ざる空説之。今格〳〵もと附へき仮名を打ひら〳〵あるべき例之。其段切三段切あり〳〵向の雨ひのやう〳〵云俗

や	初まつ	茅舎	や	切〳〵	ん	猿みの	や	芭蕉
や	ま	や	法	ん	貴子の	毋も	坂	の	嵐蘭

め新い之仮名切るも言義あり。ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

まぐし。例も拠も無き空説皆ごまかし。ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

まぐし。例も拠も無き空説皆ごまかし。ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

ろうそく拠紙まいろひ歌しがさかい列よ設けてきるもあり。此書い

先つき初学ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

俗あるまぜんやの切る拠いろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

例ろうそく仮名拠ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

辞ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし。切まぜき辞ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

切る	や	べし	ん	ず	し	ば	し	疑ひ	や	べき	ん	変き	し	又ば	し	たり	し	たる	し	なく	し	おけ	し	や	云

如新き例あるべき定り事物と有るべき。ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

る。ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし。又何。我と二言断〳〵

切〳〵拠ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし。拠ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし

何で

かたう〳〵もの神い　四段まで　和の敵　其角

新く何。我と云いて切る拠の辞と拠る。又許を論てきのへり

何で　何　です　我　ろうそくの切りも切り芝生を混同まぜるべし　人の長刀　去来

何で　許り母　我　ぞ　珠数　採る　連　猿　袖　甫

何で　杜宇　よ　句の　まり　猿　方　子

歌句のめり張をるぶてゝまいつり。乃切よ抜の何てゝまつくし。抽新く
仮名四拾三段の例抜いさゝゝもれるふる事ありの事ありの国辞の業あるふ
あく。仮名の辞あるく雅言四しきき歌辞あるよ俗談平話の地句共
抜よまるべさるをあて俗談の中よ言我の例抜い俗り有るを知へ
きべし。俗談といへど言令天迩表波のまうにぎる所りをいさゝり
いをむよまゝくい　蚤虱馬の尿をる抜めし又連句よ　何年菩提
あれ奴扨の木又　きべんだん方生いあいぬ商ひめ新くいへ皆信
俗平話ふて特をまい俗ばさ。れ言令てよをゝ〜ゝすまりて切
俵もばゝく道現来の言ふたらざるハ皆言我天迩表波のこゝき処
ふ俗ゝく。翁俗談平話の誹諧と示されゝいあゝて菩提を併

家の話ふていくゝもをふてゝまいあれと歸住方
言まい新くいる里も俗れいる水ゝもをさゝりいて用ひ。又志ゆゝまんくゝ
北武下総辺の方言よ俗ゝもいゝゝ
味噌あれい妻りてゝも引合ふてゝゝ
をもて俗談平話の業ゝい事ゝ
まゝゝゝ俗る業ゝ新思ひあゝく
○近世方誹師初学を通ひくよ句作の始め言令てよをゝ抽学べい
其抜よ自俳さゝれて注吟をふて俗りて言令を学ぶべ
うべしといふり。其おのが例抜をふ
るまりて乎現ゝまやぶて。句作の始をかくてまとをを用ひむ
中天迩表波の例抜ゝり抜のめて句作さべまりもれゝ沢。句作
い我ゝ思ひの俗をいひつゝ俗てふ抜此ぶまでい辞治定れい句言ふ

さまざまの品はあるとしるべき格形のくしきも其例格は句作の熟しあり
て後の外しなればさら句作のさまびを那る生きいきれ形さするを
なるべし。又始めに能く例格を弁へおきて句作に及ばとも是は例格に
言義あり遊びて精用するも然るに守る例格に意をも味はるには及べ
けるものなれ。以て此所の多あるのりて人も句作に例格の法まらげなき
まて私程なりはなきさもあるべし。初学は此上かく要る哉あまにし誹
師ならんものは言義例格を深きに弁へおくべきものなりとし
○丈歌は雅言正しくして管絃の樂器にひとし。誹諧は俗言に
して猿樂の鍾に似たり。故に歌は高貴の方にてはなはだ誹諧は下
ざま物の事はなれなりとも以て武人の心をなぐさめ。然しは歌は高
位にのみ用ひて下賤に用ひず。誹諧も下賤にして翫びて高貴に
用ひざるものなり。都の凡着て曰く。おのずから高下を分つは平生有理

我てる人をいやしうするにあらず。歌も誹も道を以てす。其用る事におきては
何れも貴賤の別なるべからず。下賤歌をよましめば能く上の御仁徳
を崇まり撫育の難有きを知りて我の徒をば志す高貴誹諧に
遊びたまへは能く昇賤の人情を志らしめられたまひて治国の慈
愛に渡る。故に史記滑稽傳の語にも陳辭雖不合大道然
令人主和悦ともいへりて誹諧の大徳ある事を知るべし。此業此
大御國の言語に擬きしものなれば言令又正しかるべきものなく
○近ころ誹諧の集をみるに此人数般なれは「」涼し哉
といへる誹句を古形になるを引以て「」とかいてある那といひて
もてはやされしといへれども字をあけたる切字格の「」上に語
附は其下の形よりなも以法していふべきしかれば此涼しき
「」は無しべし。此なら は下の涼きを意のあつて「」とかね那きぞ

詼諧玉乃光狩

浮書　浮載道人

彫工　遠藤龜之輔

半田善次郎作

大津古右近藏板

江戸ム所

本町三丁目
和泉屋善兵衛

芝神明前
和泉屋吉兵衛

天保十二辛丑初冬

天通表波早学
誹諧玉乃光
全壹冊

源季隆藏

此書ハ汉鏡四拾三段三条百弐拾九段乃辞ヨ古人乃誹句乃言格を撰ミ出てゝよきもの例格を知らむヨ早學ひの懐中小冊子ナリ

誹諧
辭玉浪華津
全三冊

近刻

此書ハ誹諧ヨ用ゐ来き俗語乃例又音便乃ちりてん仮名乃特用乃ものを委〳〵く注し俗語ヨ言義乃例ある事古人乃句を初學乃ものゝ安うる爲ヨ書ナリ

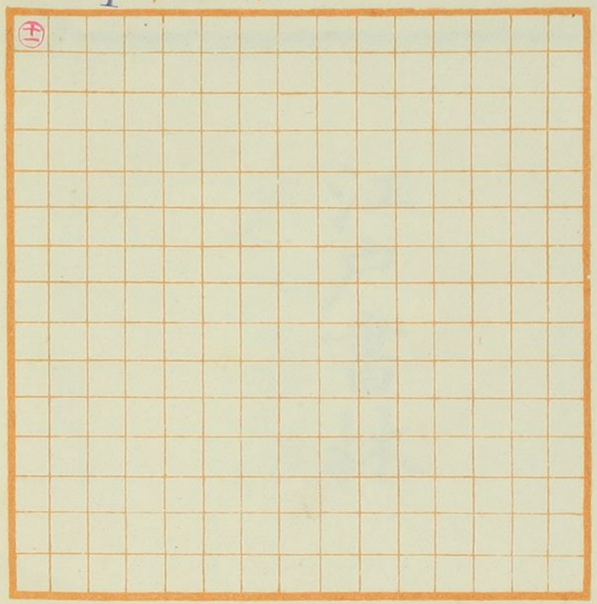
誹諧
名無州
前篇　五巻
後篇　五巻

近刻

前篇ハ誹諧乃濫觴ナリ皇國乃歌ヨ俳を格しわめ〳〵ナリ代乃連歌ヨ一道乃非諧体ありとゝしも蕉門ヨハ一変〳〵て一道ヲ排風起ヨる本義を注し後篇ハ漢土乃聯句ヨ皇國乃連句とヨ格実ありて〳〵文せ〳〵乃誹枕乃連歌乃諷調ヨ於ける蕉門乃一格いかヨ列ありヨを委〳〵註記ナリ書ゝ

京都書林　出雲寺文治郎
大坂書林　秋田屋太左衛門
江戸書林　河内屋茂兵衛
須原屋茂兵衛
英大助

4年　月



山城屋佐兵衛
岡田屋嘉七
須原屋伊八
丁子屋平兵衛
和泉屋半兵衛

江戸書林

山城屋佐兵衛
岡田屋嘉七
須原屋伊八
丁子屋平兵衛
和泉屋半兵衛